

人々から愛され、惜しまれた教会 米沢の殉教者・今日模索する教会の姿



文：古巣 馨神父
(長崎教区)

1629年1月12日、雪に覆われた米沢盆地の北山原、糠山、新藤ヶ台の三か所で53人がキリストの証人として殉教しました。男性30人、女性23人、うち5歳以下の幼児が9人。「ここで死ぬ者たちは信仰のために命を捨てる潔い人たちである。皆の者土下座するようお願い申す。」立ち会った奉行人の声が刑場にこだました、とイエズス会士バツスタ・ポツ口神父の報告書には記されています。

風土が人を育てるのか、人が風土をつくるのかは分かりませんが、米沢の殉教は確かに長崎、京都、江戸のそれとは趣を異にします。錯覚でしょうか、ここには処刑地にあるはずの罵声や怒号、のしりや悲鳴が聞こえてこないのです。むしろ、名残を惜しむ人々の、感謝とお詫びと祈りに満ちています。「この地にはひとりの悪人もいなかった」との記録の中の一行が、刑場の奉行の言葉を補ってくれます。貧しい領民とその中で生きる教会との信頼と情に溢れた関係、いま現代日本の教会が模索している原風景をここに確認することができます。

1590年、キリシタン大名蒲生氏郷が会津黒川城に入ったとき、東北の人たちははじめてキリスト教に出会います。やがて1611年、仙台へ派遣されたフランシスコ会士ルイス・ソテロ神父が米沢に立ち寄

り、そこに小さな共同体が生まれています。しかし、米沢教会の成長を見るのは1626年以降になってからです。

米沢教会はルイス甘糟右衛門と二人の息子ミカエル太右衛門、ビンセンシオ黒金市兵衛を中心に成長しています。甘糟家は代々上杉藩に仕えてきました。当初二百万石から始まった上杉藩は、徳川幕府によって終には米沢に追われ、十五万石に減封されます。その貧しさは、上下の身分を越えて互いを思い、心をついに生きている善良で素朴な米沢の人々を生み出しています。苦しみは人を清め、仕える者にします。福音に出会う前に右衛門の心は耕されてきました。1612年、右衛門は江戸でルイス・ソテロ神父から受洗します。右衛門を中心とする米沢教会は司祭が常駐しない巡回教会で、信徒は「組」の組織によって支えられ絆を保っていました。イエズス会の指導のもと「聖母の組」「聖体の組」、フランシスコ会のもと「コルドンの組」「セスタ講」がありました。信徒は「組」ごとに定期的に集まり、霊的読書と祈りを土台に孤児の世話、病人、貧困者の支援を行っていました。「すべてのキリシタンはいずれかの信心の組に入っているのを誇りとしている」と、当時の躍動的な信徒たちの姿が報告されています。

組を世話する組親は求道者を教え、洗礼



を授け、聖体を配り、集會祭儀を仕切り、葬儀や結婚式にも立ち会います。宣教師たちはかれらを力テキスタと呼んでいます。組親を束ねる惣親、甘糟右衛門の説教は「殿談義」として有名でした。年に数回巡回する司祭はこの組親と連絡を取ってより高い教義と深い靈性を学ばせ、信徒のためにはゆるしの秘跡とミサを行うだけでした。司祭が常駐しない米沢、それでも当時三千人以上のキリシタンがいたと上杉藩の文書は記録しています。司祭と信徒の使命と役割、現代日本の教会が模索する教会のひな形を、殉教時代の米沢に見いだします。

「ああ、生きていて良かった。あなたたちに来て、やっとこさ人間になって、笑うことができました。」二代目藩主上杉景勝が意地からでもキリシタンを護ろうとし

米沢の殉教者（53人）新潟教区

殉教者名	殉教年月日	年齢
ルイス(ルドビコ) 甘糟右衛門	1629.1.12	
ミカエル 甘糟太右衛門	"	
ドミニカ 甘糟	"	3
ジェスタ 甘糟	"	
ピンセンチオ 黒金市兵衛	"	
テクラ 黒金	"	17
ルチア 黒金	"	1
マリア 伊藤	"	
マリナ 長房	"	
ペトロ 弥兵衛	"	
マチアス 彦助	"	
テモテ 大峽次郎兵衛	"	
ルチア 大峽	"	
ヨハネ 五郎兵衛	"	
ヨアキム 三郎兵衛	"	
ヨハネ 板斎主計	"	
アウレア 板斎	"	
アントニオ 板斎オロス	"	
パウロ 三十郎	"	
ルフィナ	"	
パウロ	"	5
マルタ	"	3
シモン 高橋清左衛門	"	
テクラ 高橋	"	13
パウロ 西堀式部	"	31
ルイス(ルドビコ) 甚右衛門	"	80
アンナ	"	
マンシヨ 吉野半右衛門	"	
ジュリア 吉野	"	

たのは、領民たちにとって教会が不可欠の存在になっていった証拠です。泣く人たちが、教会に居場所を見つけたのです。しかし、1628年、三代目藩主定勝が江戸から戻ったとき米沢藩はキリシタン擁護派と断罪派に二分していました。「致し方なし。」万策尽きたとき定勝は藩の存続を選び、キリシタンの処刑を決めたのです。「その亡骸は、キリシタンでない人々によって丁寧に取り扱われた」と、ポツロ神父は伝えていきます。人々に心から愛され、惜しまれた教会がそこにあつたのです。

他24名

アントニオ 穴沢半右衛門
 クレセンチア 穴沢
 パウロ 穴沢重三郎
 ロマノ 穴沢松次郎(14)
 ミカエル 穴沢治(13)
 アンデレ 山本七右衛門
 マリア 山本
 ウルスラ 山本(3)
 イグナチオ 飯田惣右衛門
 ルチア 飯田
 ヨハネ 有家喜右衛門
 マグダレナ 有家
 ペトロ 有家丹蔵
 アレクシス 佐藤清助
 ルチア 佐藤
 エリザベト 佐藤(3)
 パウロ 佐藤又五郎
 N・七 左衛門
 マグダレナ
 女兒(5、3)
 アレクシス 庄右衛門
 カンディッド 坊主(14)
 イグナチオ

世の人々の悲しみと苦しみを、自らの悲しみ苦しみとして共に生きた米沢の教会。受け止めた福音を支えに、養成と祈りによって成長した教会を、痛んだ社会は癒しと希望にするのです。現代教会への真摯な問いかけです。

ペト口岐部と187殉教者 まとめ

17回にわたって「ペト口岐部と187殉教者」を紹介してきました。殉教者の生き方は、現代社会や教会に力強いメッセージを与えてくれます。どんな内容が込められているかを振り返ってみましょう。

家庭での信仰

若い侍であった八代のヨハネ南五郎左衛門は、一度は信仰を捨てますが、心から回心して殉教します。翌日には彼の妻と養子なども殉教。勇気に満ちた夫婦の愛、親子の愛が見られます。また渡辺、三石、服部の3人は、殉教した人たちの遺体をひそかに長崎へ運びます。彼らは司祭不在の時代にあつて、洗礼を授けたり、教理を教えたりします。

生月では多くの信徒たちが島から離れていく中、残された信徒たちの面倒をみるガスパル西玄可の働きが光ります。彼は領民たちからも深い信頼を受け、生月島の信徒のリーダー、キリシタンの家庭のモデルとなります。

京都ではキリシタン弾圧に伴い、宣教師たちがマニラやマカオに、信徒の世話役たちは東北に流され、下級武士と貧しい信徒たちだけが残ります。彼らは、貧しさの中でも支え合いながら、お互いの信仰を深めていきます。特に橋本太兵衛たへいゑいの家族は、深い親子の愛を証しました。

島原・雲仙の殉教者には、わが子に信仰を伝えた父と、その父の信仰を励ましとし、感謝を口にする子の姿は、現代の親子のあり方を問いかけてくれます。

薩摩のレオ税所は、家臣としての務めを忠実に果たすとともに、信仰についてしっかりと信じた信念を持っていました。短期間のうちに洗礼を受けていますが、夫婦間の信頼関係、子どもに対しては父としての威厳があります。

細川忠興の忠実な家老であった加賀山隼人、また彼と親戚関係にあつた小笠原玄也は「將軍様が何と言おうと、私の主君である忠興様が何と言おうと、私は転びません」と言明しています。また玄也の家族は、深い観想生活を通して信仰を証しています。

司祭の鑑かがみ

ペト口岐部は、司祭を目指してマカオ、ゴア、イラン、聖地、ローマへと旅します。ことばや風俗も知らず、砂漠の生活に慣れない一人旅は、どんなに苛酷だったことでしょう。ローマで司祭になり8年の歳月をかけて帰国。その間、4回の難船。16年ぶりの祖国は、想像を絶する迫害の嵐が吹き荒れていました。殉教する人、転ぶ人など。やがて彼は捕らえられ、江戸で井上筑後守政重の取り調べを受け、拷問を受けます。「ペト口岐部は転び申さず候」の所見は、

彼の力強さを物語ります。

ジュリアン中浦は、遣欧使節として光輝く時期もありましたが、帰国後、司祭になるまで何年もかかり、劣等感も感じます。しかし、司祭になってからは迫害下の教会で、自分の名誉を誇示することなく、命がけて奉仕する司牧者でした。

「魔法を使う宣教師」と呼ばれたトマス金鐙。昼間は長崎奉行所の馬丁になりまして桜町牢屋を訪れ、牢屋に捕らえられていたグティエレス神父、石田神父などを励まします。夜になると、隠れ家で信徒にゆるしの秘跡を授けたり、ミサをささげます。勇気があり、大胆で、知的で、実行力のある司祭です。

マニラで司祭に叙階されたディオゴ結城神父は、帰国後、京都に派遣されます。京都、大坂を拠点に、五畿内、四国、江戸、遠くは津軽まで追放された信者たちを訪問。最後はディオゴ神父一人だけとなりました。



ペトロ岐部（舟越保武作）

それでも彼の意志は衰えることなく、熱心に宣教活動を行い、困っている家庭があれば、命がけてそこを訪れています。

祈る殉教者

天草のアダム荒川は、宣教師たちが追放されたあと、勇気をもって使命を果たしていきます。やがて彼も捕らえられ、牢獄に9日間、さらに富岡で60日間拘留されます。「私はただ神様のお助けと慈悲におすがりするだけだから、祈ってください」と、苦しみを祈りに変える人でした。

有馬の教会は、「聖母の組」「殉教の組」などが活動していました。殉教の日、2万人の信者が早朝から手にローソクとロザリオを持ち、一番よい服を着て、有馬川河口の両岸に陣取り、祈りをささげます。2万人の祈りの声は地鳴りのように、天にとどろいたことでしょう。

山口の毛利輝元の家臣であった熊谷は、主君に「信仰を捨てるように」命じられませんが断ります。殉教にあたって、キリストの受難をよく黙想する人でした。

江戸の殉教者の原主水は、徳川家康の走衆の頭として名声を上げていましたが、すべてを失い、ハンセン病者の施設に運ばれていきます。愛する女性、恩人など、すべてを失った時、キリストの本当の十字架が

見えてきます。不自由な体ではあっても、生涯を神にささげた殉教者です。

広島遠山甚太郎はフランコ神父の話を聞いて、洗礼を受けます。非常におとなしく、やさしい性格で、信心深く、フランシスコの靈性に従って生きる道を選びました。結婚後、彼の家は宣教師たちに開かれ、自分の家を宣教師たちの宿として提供します。

社会の中で働く

1583年、社会福祉的なミゼリコルディアの組が長崎で組織され、本部が興善町に置かれます。この組は社会から見捨てられた病人に薬を運んだり、病気を癒したり亡くなった時には遺体の埋葬を手伝っていました。この組の会長を務めていたのが、ミカエル薬屋です。敵意に満ちた社会の中で、追放、投獄、拷問を受けますが、彼はじつと耐えていきます。

幕府から米沢に追われた上杉藩の侍たちは貧しさの中、上下の身分を越えて互いに支え合い、感謝し、心を一つにして生きる善良で素朴な人々でした。イエズス会の指導のもとで、「聖母の組」「聖体の組」、フランシスコ会のもとで「紐の組」がありました。信徒は定期的に集まり、靈的読書と祈りを糧に、孤児の世話、病人、貧困者の支援を行いました。甘糟の説教は「殿の談義」として多くの人々の心に響きました。